

# 小規模校どうしの交流 — 定期的な朝のオンラインスピーチ交流と 直接交流を通じて行う協働する学びの実践 —

和歌山大学：山田 真稔（研究代表者）

高野町立花坂小学校：田所 勝美

かつらぎ町立梁瀬小学校：玉置 洋一

## 1. はじめに

協働する学びを実践していくことは、極小規模校において難しく、校内だけでは限界があり、また、コミュニケーション力の育成は小規模校共通の課題である。令和3年度からつながりのある両校が定期的にオンラインでつながり、並行してお互いが行き来して直接交流する機会も多く設定し取り組んできた。小規模校において、積極的に他校と関わる機会を設定し取り組むことは、協働する学びを実践する方策として有効であると考えられる。



## 2. 研究の経緯

令和4年度、両校においてコミュニケーション力の育成が課題となっていたことから、両校が以前から行っていた「全校朝の会」をオンラインで定期的につなぐ取組を始めた。令和3年度に「気温調べ」をきっかけとしてオンライン交流したことも有効に働き、直接交流も実施できた。

令和5年度は、計画的にオンライン朝の会を行うとともに、直接交流する機会も設定し、相乗効果で協働する学びを充実させた。本年度の児童数は両校合わせて11名であり、下記日程で6年生から順に、毎月1名ずつスピーチをし、互いで話し合う形をとった。花坂小学校においては、他校と遠隔合同授業も継続的に行い、こちらにおいても直接交流を並行実施し、成果が見られる。

以下、各校における取組状況を報告する。

### （オンライン朝の会 令和5年度の日程 及び 発表者）

4月19日 花坂小6年生	5月24日 花坂小5年生	6月21日 花坂小5年生
7月19日 花坂小4年生	9月20日 梁瀬小3年生	10月25日 花坂小3年生
11月22日 花坂小3年生	12月20日 花坂小3年生	1月17日 梁瀬小2年生
2月21日 花坂小2年生	3月13日 梁瀬小1年生	

## 3. 各校の取組

### 3.1. 花坂小学校

#### 3.1.1 交流の目的

本校は、児童が1名の学年が3学年あり、単学級（一人学級）と小規模複式学級からなる極小規模校である。児童は、場に慣れることや新たな関わりを作るまで時間がかかり、表情が乏しく小声で話す、あるいは話せず固まってしまう姿が見られた。そのため、中学校進学時に大きな集団の中にスムーズに入っていくことに不安があり、また、将来的にも様々な人々とかかわり、よりよい生活ができるようにやりとりしていくもととなる力を育成することが必須である。人との関わり合いの中で多様な考えに触れ、自分の考えを持ち、自らが

かわり、自分の考えを表現し、対話によって深めていくことができる児童の育成を目指すこととした。

このことと関連して、同町内にある高野町立高野山小学校、富貴分校とは、同じ中学校に進学することを見据え、行事や校外学習、授業に参加するなどして長年にわたって交流してきており、スムーズな移行に成果をあげている。

昨年度より上記2校に加えてかつらぎ町立梁瀬小学校、九度山町立河根小中学校、紀の川市立麻生津小学校と対面やオンラインで交流をしている。規模が少し違う小規模の小学校2校と、中学校とも交流できる小規模の小中学校である。取組を進めていくと、「お客さん」になることが少なくなり、本校児童が主体的に活動する場面も見られるようになった。

### 3.1.2 オンライン交流・授業

オンラインでの自己紹介から始めたが、はじめは、表情が硬く、相手を意識した話し方ができなかった。つぶやくような小声や、とにかく話せばと、早口になってしまう児童もいた。「対話」できるやりとりをしていくために、児童には、はきはきと話し、一息で話さず途中で区切って話すことや、相手に対し聞こえていることや了解したことなどが伝わるようにリアクションを大きくとることを繰り返し指導してきた。期間が空いて基本から指導し直したこともあったが、繰り返し粘り強く取り組んだ結果、高学年は少しずつ自ら意識できるようになり、いつも早口になる児童も相手を意識した話し方を心がけてできるようになってきている。

また、本校では話し方、聞き方、やりとりの仕方を学び、自分の考えを持って対話できるようにするため、毎朝全校でフリートークに取り組んでいる。

### 3.1.3 オンラインでの1分間スピーチ

梁瀬小学校との「朝の1分間スピーチ」は、今年度は年間計画を立て、月1回のペースでオンラインの交流をしている。内容は、日記、行事の感想、本の紹介、学習のまとめなどである。

定期的な交流により、児童は互いに顔なじみになり、オンラインでのやりとりにも慣れてきているが、児童が司会を担当しており、スムーズに進まないこともあるため、意見を引き出したり調整したりする司会の力量も上げていく必要がある。

また、今年度は、梁瀬小学校の在籍児童が1年生から3年生であるため、スピーチ内容をあらかじめ伝えておくようにした。事前の情報交換により、高学年の話す内容に対して意見を言えるよう支援してもらえる。

梁瀬小学校とは対面での交流も行っている。対面交流の後、期間をあけずにスピーチ交流をした時は、いつも以上に和やかな雰囲気できりとりができていた。直接会うことはオンライン交流を円滑に進めるためにも大変有効である。

### 3.1.4 対面での交流

5校の交流校とはオンラインだけでなく対面での交流も行っている。以下、代表例を挙げる。

梁瀬小学校とは、「花坂の名産品である焼き餅づくり」とかつらぎ町で取り組んでいる「ド

ローン操作」の交流を行った。また、本校で開催した「一輪車教室」に招いて一緒に活動をした。「田んぼや川の生き物観察」では、地域の方にご指導いただき、花坂地区を流れる川や田んぼの生き物を観察した。梁瀬小学校の「おでかけ音楽会」は、梁瀬小学校児童、花園地区のみなさんと一緒に鑑賞した。

河根小中学校とは、本校で取り組んでいる「太鼓」と河根小中学校で学んでいる「バイオリン」の演奏を披露し合い音楽交流をした。また、中学生も一緒になって様々なゲームをして交流した。

麻生津小学校とは、本校の周りにある「田んぼや川の生き物観察」や「焼き餅店舗の製造過程の見学」などを行った。また、本校児童が企画した「ギネス大会」で、普段世話をしてもらう低学年や中学年の児童が、各コーナーの担当者として企画運営をすることができた。

これらを通じて、自校にない設備での学びや、同学年の児童と思い切り遊んだり活動したりするなど、自校だけではできない多様な体験ができており、これは相手校にも言えることである。そして、何よりも対面で交流することで互いを理解し絆ができる。このような体験を積み重ねていくことは本校児童にとって極めて重要なことである。



### 3.1.5 教員どうしの協働

小規模校では、同学年を担当する「相担」がいないが、交流や合同授業により、打ち合わせなどを通して指導に係る相談や学び合いができる。また、合同授業をするには、各校の児童について共通理解も必要であり、生徒指導上の学び合いが生まれる。

しかし、実際には教員のモチベーション維持は難しい。だからこそ、「交流したらいいことあったな。」だけではなく、成果と課題をしっかりと検証し、「児童につけたい力は何か。」を見失わず、改善を図りながら取り組んでいく必要があると考える。

### 3.1.6 取組の成果と課題

小規模校間での交流を通して、児童はオンラインでのやりとりに慣れ、自ら関わろうとすることや、自分の考えをもって伝えること、相手を意識しコミュニケーションをとろうとすることなどができるようになってきている。児童自身が目標を持って交流学习に臨むことで、対話力や人と関わっていく力の伸長につながっていると言える。

コミュニケーション力を児童につけていくためには、ただ交流の機会を作ればよいということではなく、改善すべき点がいくつもある。

まずは、交流する内容である。内容によっては、せっかく同じ場にいるのに、自分のすべきことに一生懸命で個々の活動となり、話すらしない状況が見られたため、席やグループでの学校の偏りが無いようにし、活動は共に知恵を出し合わないといけないことや教え合いの必要な内容にするようにした。児童だけでなく、教員も同様に、積極的に相手校の児童とかわらわろうとする姿を見せていくことが大切である。

「僕が交流で緊張しているとき、麻生津小学校の皆さんが明るく話しかけてきてくれたか

ら緊張がなくなりました。僕に明るく話しかけてきてくれて本当にありがとうございました。」これは昨年度の卒業生が書いたメッセージである。こういう思いは誰もが持っている。特にホーム側として相手校を迎え入れる際には声掛けをしていくように、教員もともに取り組んでいこうとしているところである。

本校だけでは実施できない教育活動が実現できたことの効果はまだ見えていないが、自校や地域のことを見つめ直し、広い視野を持つことにつなげていきたいと思う。

「交流している学校と複数校集まって大勢で交流をしたい。」という考えを持っている児童もいる。まだまだその声は大きくないが、児童の声を生かした活動や各校の共通する課題等について協議する「拡大児童会」などが実現できればと考えている。

## 3.2. 梁瀬小学校

### 3.2.1 学校の状況

本校は1年女児1名、2年男児1名、3年女児1名、1年3年は姉妹で、1・2年生複式学級、3年生は1名だけの単式学級の計2学級という、和歌山県内では最小規模の小学校である。

そのため、

- ・学校内において同学年での多様な学習経験や遊びの体験ができない。
- ・町内近隣校へは25km以上離れており日常的な直接交流が難しい。

という状況であり、たくさんの人とコミュニケーションをとる機会をつくるのが困難であり、協働する学びを実現するには難しい状況であった。

そのような中、テレビ会議ツールが使いやすくなってきたことから、これを活用することで有効な取り組みができ、また、直接交流も並行して行い、相乗効果が期待できると考えた。

### 3.2.2 オンライン交流、直接交流の取組

花坂小学校と、月1回のオンラインスピーチ交流（朝の8：25～15分程度）を高学年から順に行うこととした。また、下記のように直接交流できる機会も設定した。オンラインで出会った友達と直接一緒に活動する、また、一緒に活動した友達とオンラインで話す、というふうに、相乗効果が見られた。

（直接交流の機会）

- ・5/26 金「川の生き物、田んぼの生き物観察」（花坂小）
- ・11/29 水「お出かけ音楽会」（梁瀬小）
- ・12/12 火「一輪車教室」（花坂小）

この取組を進めるにあたり、梁瀬小学校では、以下の三つのことに取り組んだ。

一つめは、児童がオンラインのテレビ会議に慣れるため、長期休業中に4回、オンライン朝の会を実施したことである。かつらぎ町内の小学校は Teams が導入されており、そのテレビ会議機能を使って、自宅から全校児童が参加して行うものであり、各自が元気であることを伝えるのはもちろん、テレビ会議に慣れることや話



し方の練習に役立った。

二つめは「朝のスピーチ」を毎週実施することである。教員側でテーマを決めて、大きい学年から順に1日一人ずつ、各自毎週1回ずつスピーチを行う。質問・感想も出し合うこととし、目的をもって聞く意識を持たせるようにした。

三つめは、スピーチ、授業など、改まって話す場面を多く設定し、練習をしたことである。質問に対して自分の言葉で答えようとする意識を持たせるように取り組んだ。

これらの取組をもとに花坂小学校との交流を進めていった。

進めていく段階において気づいたことや指導したことは大きく三つある。

一つめは、高学年のスピーチ発表の内容は低学年にとっては難しいということである。高学年向けの内容であったり、使う言葉が難しかったりする場合もあり、児童の反応を見ながら、必要に応じて教員が側に行き解説や補足をしながら対応した。1年生から6年生までがいる集団での話は、教員の支援も入れるなど、工夫して進めていきたい。事前に話の内容が決まっているときは、予定を伝え合い、教員も心づもりをしておくようにした。

二つめは、スピーチ内容についての質問とスピーチの仕方についての感想を前半と後半に分けて実施すると、低学年児童の発言が増えたことである。「わからないことや聞きたいこと」「お話を聞いて思ったこと」と、具体的に聞くと、低学年児童も発言しやすくなった。1、2、3年生しかいないため、「何でも言っていいよ。」というよりは、何を話したらいいかを具体的に示す方が考え易かったようである。

三つめは、話し方は、機器の特性に合わせて、大きな声で、文節で区切りながら話すことを再度指導したことである。児童は話したいことを一生懸命話すものの、オンラインの相手に伝わる話し方ができていない場面も見受けられたため、その都度指導し、改善するようにしている。「相手」を意識して取り組むことができるため、効果が高いと言える。

### 3.2.3 取組の成果と課題

取組の成果として、オンライン交流でのつながりができるので、直接交流の機会には子どもどうしが自然な形で、自分たちから一緒に過ごす場面が見られたことがあげられる。オンラインで知り合っていることが、直接交流をスムーズに進め、かつ有意義なものにすることにつながっている。加えて、直接交流のあとの回のオンライン交流がスムーズに進むという効果も見られ、オンライン交流、直接交流の相乗効果がみられた。

また、毎日の校内（児童3名、職員3名）だけのスピーチに比べ、より多くの児童の発表や高学年の発表に触れることができた。校内の限界を超えて、たくさんの考えや意見に触れることができ、また相手を意識して発言したり聞いたりできる場をたくさん経験でき、有効であった。

さらに、オンラインの活用で、移動の負担が少なく同学年やそれに近い学年の児童とたくさんの交流ができ、つながりが深まったことも成果である。また、花坂小学校の児童、先生方の優しい対応のおかげで、次に向けて前向きに取り組むことができ、直接交流の機会も楽しみにしていた様子から、継続的に取組を進めていくことができる状況であった。

そして、各自年1回のスピーチは、それほど負担にならなかったことも成果である。社会科や総合的な学習の時間で学習したことを伝える機会として活用することができた。「発表のために」特別な取組をするわけではなく、自然とオンライン会議に向きあえる状況であっ

た。

今までの交流を、各校が無理なく取り組める工夫をしながら、充実させていきたい。そのことが日常的な交流や多様な考えに接する機会、遠隔合同授業の実施などにつながると考える。

#### 4. 成果と課題

両校及び交流関係校において、児童どうし、教員どうしが協働して取り組むことができ、コミュニケーション力の向上がみられ、相手を意識した表現や関わり方ができるようになってきている。交流の取組だけでなく、各校のコミュニケーションに関連する学習活動の取組も、交流学習の成果につながっている。

また、交流が有効に働くためのしかけが大事である。ただ一緒に活動させるのではなく、協力して活動したり、協働して学んだりできるしかけを工夫することが大切である。

遠隔合同授業の実践は、花坂小・麻生津小の成果が参考になる。授業を通じていろいろな考え方や意見に触れることができ、柔軟で多様な考え方ができるようになりつつある。授業の計画や、教員どうしの打合せは、負担になる面もある。花坂小・麻生津小では教員どうしが対面で打合せを行い、対面の授業も実施した。打合せは、直接会う機会も大事にしながら、オンラインを有効活用して効率的に進めていくなどの工夫をしていく必要がある。また、実施のためにたくさんの機材を要した。いろいろなアドバイスと工夫で実現したが、実践をより計画的・日常的なものにしていくために、今後はより簡単に、効率的に進められる機材や設定を研究していく必要がある。

また、関係校どうしは早期から段階的に計画、打合せを行い、実施に至っている。打合せにかかる時間や労力は少なくはないが、実績を積み上げていくことで効率化し、よりよいものにできると考える。関係校どうしのつながりや相互理解の上に立って進めていくことで、取組をさらに充実させていくことができると考える。

#### 5. おわりに

学級・学校の壁を超えてつながる協働的な学びは、小規模化しつつある学校においてはもちろん、学校、学級規模にかかわらず、協働する学びの実践に有効である。

そして今後、遠隔合同授業の継続的・日常的な実践につなげていくためには、打合せや、直接交流の機会の設定など、まだまだたくさんの課題があり、解決のための方策を検討していく必要がある。

#### 【参考文献】

- ・文部科学省(2021) 遠隔教育システム活用ガイドブック(令和2年度遠隔教育システムの効果的な活用に関する実証)第3版
- ・伊都地方へき地・複式教育研究会(2021)令和3年度「研究のあゆみ 第54号」
- ・伊都地方へき地・複式教育研究会(2022)令和4年度「研究のあゆみ 第55号」
- ・かつらぎ町立梁瀬小学校(2021)「令和3年度 研究収録」
- ・かつらぎ町立梁瀬小学校(2022)「令和4年度 研究収録」